

瀧 廉太郎「憾」^{うらみ}

加藤 良一 令和4年(2022) 11月1日

瀧 廉太郎(明治12年(1879) 8月24日 - 36年(1903) 6月29日)は、作曲家にしてピアニスト、明治の西洋音楽黎明期を代表する音楽家の一人です。

代表作「荒城の月」は、「箱根八里」と並んで「中学唱歌」に掲載され、「荒城の月」は、ベルギーで讃美歌(聖歌)として使われているとのこと。また、組曲『四季』の第1曲目「花」は、今でもよく歌われています。因みに組曲のほかの3曲は「納涼」、「月」、「雪」からなっています。

結核に罹り失意のうちに帰国

廉太郎は、明治34年(1901)4月6日、日本人音楽家では3人目のヨーロッパ留学生となり、5月18日ドイツのベルリンに到着しています。その後、さらにライプツィヒに移り、メンデルスゾーンが設立したライプツィヒ音楽院に入学、ピアノ、作曲、音楽理論を学び始めました。しかし、そのわずか5か月後の11月に悲運にも肺結核に罹患し、入院加療を続けましたが病状は改善することなく、失意のうちに帰国を余儀なくされました。

渡独翌年の明治35年(1902)7月10日にドイツを発ち、ロンドンを経由して3か月後の10月17日に横浜に到着、すぐさま父の故郷大分県へ帰り療養していましたが、明治36年(1903)6月29日自宅で亡くなりました。満23歳没。結核であったことから、感染を恐れ多数の作品が焼却されたといえます。したがって、正確な作曲数は不明で、はっきりその存在が確認されている作品は34曲のみといえます。結核療養所は、明治22年(1889)から開設が始まっていますが、廉太郎が結核になった当時はまだ近くになかったのでしょうか。

ところで、ライプツィヒの街角には、瀧廉太郎の没後百年記念の碑が建っており、おそらく日本人作曲家の浮き彫り銘板が外国で設えられた最初の記念像ではないかとみられています。

絶筆となったピアノ独奏曲「憾」^{うらみ}

廉太郎は死の直前、明治36年(1903) 2月14日、絶筆となった「*Bedauernswert* 憾^{うらみ}」というピアノ曲を遺しました。

「憾^{うらみ}み」とは、他と比べて自ら「不満に思う」こと、あるいは「もの足りなく感じる」ことです。したがって、憎しみを指すような、「恨み」や「怨み」ではなく、「心残り」や「未練」、あるいは「無念」といった思いを廉太郎はこの曲に託したのでしょうか。因みに“*Bedauernswert*”はドイツ語で、「残念」とか「不運」というような意味です。

平成5年(1993)に上映された『わが愛の譜—瀧廉太郎物語』という映画は、同名の原作に基づいて制作されましたが、ピアノ曲「憾」がまさに生まれるその時について、原作では次のように触れていると、音楽評論家の海老澤敏さんは「瀧廉太郎—夭折の響き—」で引用しています。

明治36年(1903)が明けると、廉太郎は枕から頭が上がりなくなった。毎日、薄暗い部屋のなかで天井を見あげていると、さまざまな思いが胸に去来した。楽しい思い出もあれば、つらい思い出もあった。それなりに充実した歳月だったと言えるかもしれない。だが、最後は結局、まだ死にたくないという思いに行き着いた。ぼくはまだ若い。ぼくの音楽は、まだ始まったばかりだ。ぼくのなかには、ぼくによって生み出されるべき無数の音楽が出口を求めてひしめいている。このままでは、死んでも死に切れない。憾みを後世に残すことになる……。

そこまで来て、廉太郎は、はっと思い当たった。そうか、どうせ憾みを残して死ぬのなら、自分でその憾みに形を与えてやればいい。そこに、これまで学んできたぼくの音楽のすべてを注ぎ込もう。そうすれば、ぼくの未来の作品たちも納得してくれるだろう。そして、もちろん、ぼくを育て、見守ってくれた周囲の人々も……。ぼくが十全に生きる道は、もうそれしかないのだ。

廉太郎は高熱を押して起き上がり、机の前に正座した。体は少しフラついたが、気持ちは落ち着いていた。目をつむって心の風に耳を傾け、胸の波濤を凝視した。それから徐ろに五線紙を広げ、一気にペンを走らせた。廉太郎の部屋の灯は、深夜を過ぎても消えなかった。母が心配して起きてきた。

「廉太郎、何をしているの。早く寝ないと体に障りますよ」

「お母さん、ぼくの体は、もうこれ以上障りようがありませんよ。ぼくはいま、遺書を書いています」

「おまえ、まさか…」

「はい。もう長くないことは、自分でもよくわかっています。だから、ぼくがこの世に生きた証しを、はっきりした形で残しておきたいのです。ぼくはこの曲に『憾』という題をつけようと思っています」

「おまえはこの世を、わたしたちを憾（恨）んでいるのですか」

「いいえ、憾（恨）んでなんかいません。むしろ感謝しています。だからこそ、そのご恩に報いることができない自分が、自分の命が憾（恨）めしいのです」

「……………」

母は、それ以上、何もいわなかった。東の空が白みかけるころ、やっと『憾』が完成した。廉太郎はそのまま蒲団に倒れ込み、翌日の朝まで眠り続けた。

ピアノ曲「憾」は、Allegro marcato 二短調、8分の6拍子、三部形式の短い曲で、悲劇的な旋律が胸を打ちます。その後、廉太郎はこの曲を推敲し、その過程で最終稿以外の自筆譜も残されています。さらに、廉太郎死後に、他者によりいくつもの校訂楽譜が作られているようです。

校訂を加える理由は、廉太郎が自身意図した音楽表現を余すところなく表現しているとは言い難いと思われるからだといえます。

【自筆譜】

Den 14. Februar 1903.

Bedauerwerth
憾.

Allegro Moderato.

Franz Liszt's autograph manuscript for piano, titled 'Bedauerwerth' (憾). The score is dated February 14, 1903, and is marked 'Allegro Moderato.' The manuscript shows the composer's original notation, including complex piano accompaniment and melodic lines.

校訂楽譜が手稿譜と異なるわけ

「憾^{うらみ}」には、手稿譜と異なる校訂楽譜がいくつも存在しています。校訂楽譜とは、「元の楽譜を、詳細に調べ、音楽的に検討して、よりよい形に訂正する試みのこと」と考えればよいでしょうか。作曲家本人が推敲して校訂することもあれば、のちに他者が校訂することもあります。

廉太郎の死後、明治43年(1910)に出版された、いわば「初版」にあたる楽譜は、最終稿となった自筆楽譜を基にした手書きの筆写譜でした。その後、さまざまな形で校訂が行われていますが、その過程については、喜多宏丞 著「瀧廉太郎《憾》：手稿譜に基づく校訂楽譜の作成」(後述)という論文に詳しく書かれています。

この論文によれば、「初版」は「演奏を目的としたというよりも、瀧廉太郎の追悼の意味合いが強いもの」であり、「写譜に手慣れていない、素人に近い人物の手」によって作られたため、精度に難があり、強弱や表情記号などがかなり欠落したミスが多いものだったといえます。

さらに、「最終稿以外のバージョンの扱い」について、つぎのような見解を述べています。

推敲過程で生まれた様々なバージョンは、試行錯誤を経て最終稿へと収束している。しかしこのことは、他のバージョンが不要であることと決して同義ではない。筆者は、異稿の多さで演奏家や校訂者を悩ませるショパンやリストの作品の演奏において、各バージョンの(いわゆる)「正当性」を問うこと、すなわち、あたかも唯一の「正しいバージョン」が存在することを前提とするかのような議論を重ねることは不毛であり、むしろ、より多様で魅力的な音楽体験を生み出す足掛かりとすべきであると考え。(中略)

公開演奏に際しては、作品の魅力(あるいは作曲家の心)を聴衆に届ける、という演奏者の役割に鑑み、「決定稿」を用いることが基本となるのは言うまでもない。しかしそれは、目の前の楽譜にただ盲従することと同じではない。作品の成立過程で検討された全てのバージョンに価値を認めた上で、「作曲家自身の判断」という最も大きなファクターを勘案し、その結果として、「決定稿」に立脚した演奏表現が「演奏家自身の思考と感性(あるいは共感)によって」導かれることが望ましい。

衝撃的な一音で曲が閉じられる

つぎに一例として示す校訂楽譜は、元の手稿譜にはない“Regret”と英語で表記されていますが、これもドイツ語の“*Bedauernswert*” 同義、「残念」「遺憾」「後悔」「悔恨」「悲嘆」「落胆」などを意味しています。

「憾」の最後は衝撃的なひとつの低音で突然終わり、廉太郎の運命を暗示するかのように響きます。この音は、鍵盤の一番左端にあるにもかかわらず、右手で弾くように指示されています。

知り合いのピアニストに問い掛けたところ、つぎのような感想をもらいました。

最後のDの音は左手のその直前の音域より低い音ですから、左手で弾く方が弾き易いはずですが、重くのし掛かる様な音を要求しているのではないのでしょうか。そのため、右手はあの僅かな間で身体を左に倒さなければ弾けない音域へ跳躍しなければならないから、否が応でも全体重を掛けざるを得ない状態になると思われま。

それが瀧廉太郎の意図する音の表現なのではないのでしょうか。

憾(うらみ)

Regret

瀧 廉太郎

Allegro marcato ♩ = 100

6

11

60

「憾^{うらみ}」について、ピアニストの小原 孝さんは、ご自身の演奏（Youtube※）で次のような感想を書かれています。

（この曲は）音楽的な才能に溢れた若き天才が、留学した直後に病に倒れ23歳という短い生涯を終える直前、失意の中で作曲された最期の作品とされています。最後の音（低音）はまさしく「絶望」や「憾」の音とされていますが、明治時代に廉太郎が日本の音楽界のために努力してくれたからこそ、現在私たちが当たり前西洋の音楽を演奏出来る事に繋がっている。僕はこの音を未来に続く希望の音として演奏しています。

※：小原 孝（ピアニスト）「憾」 Youtube

<https://www.youtube.com/watch?v=qK-sk1AX80Q>

【関連資料】

- ・ 瀧廉太郎《憾》：手稿譜に基づく校訂楽譜の作成 喜多宏丞^{きただこうすけ} 著
〔大分県立芸術文化短期大学研究紀要 第59巻(2021年)〕
[file:///C:/Users/User/Downloads/59\(51-70\).pdf](file:///C:/Users/User/Downloads/59(51-70).pdf)
- ・ 瀧廉太郎—夭折の響き— 海老澤敏^{えびさわびん} 著（岩波新書2004年）

Back

音楽・合唱TOPへ

Home

HOME PAGEへ